

# 空蟬

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 空蟬

地は 京都

季は 七月

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度都に上り。寺社古跡をも一見せばやと思ひ候。

道行

「身の憂きを。思ひ知らずは如何にせん。く。厭ふながらも廻る世は。かゝる旅寐の浮枕。野に臥し山を分け過ぎて。いと見つゝも急がるゝ。月の都に着きにけり。く。

ワキ詞

「我都に上りこゝを問へば。三条京極中川の宿りとやらん申し候。実にや昨日今日秋の始めの庭の面に。まだなつかしき水の心ばへ。田舎家だつ柴垣して。そこはかとなき虫の声。梢の蟬の声々まで。実にあはれなる気色かな。古言の思ひ出でられたるぞや。空蟬の葉に置く露の木隠れて。忍びくゝに濡るゝ袖かなと詠じけんも。此所にての事なるべし。あら面白や候。

シテ詞

「なふくあれなる御僧に申すべき事の候。

ワキ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

シテ 「唯今口ずさび給ふ言の葉ぐさの末の露。本の心を  
思し召さば。光る源氏の御歌をば。何とて詠じ給  
はざらん。

ワキ 「いや是は唯所から。梢の蟬の声に催され。唯何と  
なく思ひ出でたり。さてく源氏の御歌は如何に。

シテ 「空蟬の身をかへてげる木の本に。猶人がらのなつ  
かしきかなと。詠じ給ひし御返事は。

ワキ 「忍びくゝに濡るゝ袖。さては空蟬の御歌よなふ。

シテ 「中々なれやあはれ実に。こゝはゝかなき中川の。  
御方違の跡ぞかし。よくく弔ひたまふべしと。

地 「夕暮に。命かけたる蜻蛉の。く。有りやあらず  
や問ふ人も。無き世なりけり。あはれと思し召さ  
れよ。実にや名残をば。庭の浅茅に留めて。物す  
ごき夕べなりけり。く。

地クリ 「実にや葛城に。かゝる久米路の岩橋や。絶えにし

跡は白雲の。遠き世語り申すべし。

シテサシ

「光る源氏中将と申せし頃ほひかや。

地

「彼中神のかごと故。此中川の御宿り。忍ぶの乱れ

浅からず。

クセ

「其夜や憂かりけん。何心なき空までも。見る人か

らの天の原。月の光りさへ。収まれる物から。影

さやかなる有明の。

シテ

「つれなさを。恨みもはてぬ東雲の。

地

「取りあへぬまで驚かす。衣々の御名残。いかゞあ

るべき身の憂さを。歎くに飽かで明くる夜も。そ

れのみならず空蟬の。もぬけも汐馴れし。いにし

へを弔はせ給へや。

ロンギ地

「昔語を聞くからに。いとゞ心も法の門。出づる名

残を如何にせん。

シテ

「旅人の。着るてふ笠のすげなくも。一村雨と振り

捨てゝ。何方に日も暮れぬ。此宿りにも留めまほ

し。

地「星の逢瀬も程近き。御住家とは是やらん。

シテ「恥かしながら中川の。

地「宿りはこゝも。

シテ「軒旧りて。

地「数ならぬ伏屋に。生ふる名のみは箒木の。梢に鳴

くは空蟬の。あるかと見れば其まゝ。道にあやな

くなりけり。く。く。(中人)

ワキ詞

「さては此世別れし空蟬の。現に顕はれ給ひけるぞや。いざや御跡弔はんと。

歌

「夜もすがら。思ふや法の苔衣。く。袂に月の隈もなき。此妙経を讀誦して。彼御跡を弔ふとかや。

く。

後シテ

「あら有難の御弔ひやな。此御経は有情悲情も。漏るゝ方なき妙典の。功力に引かれて空蟬の。うつゝなき世を忘草。菩提の種となりたるぞや。有難や。

ワキ「不思議やなまどろむとしもなき東雲に。夢か現か  
空蟬の。姿顕はし給ふ事。

シテ「唯是れ法の不思議なれば。

ワキ「即ち歌舞の菩薩の舞。

シテ「恥かしや。声も仏事をなす蟬の。

地「羽袖を返し舞ふとかや。(舞)

シテ「山の端に。雲のよこぎる宵の間は。

地「出でゝも月の待たれこそすれ。

シテ「待たれし月も遠方の。

地「待たれし月も遠近人に。言葉をかはす法の縁も。

隔てなき軒端の萩の。露うちはらふ風に乱るゝ。

蟬の諸声こゑぐに。鶏の音も明け行く空の。月

の小菴敷妙の。風の手枕袖触れて。月のさむしろ

風の手枕の。夢は覚めてぞ明けにける。